

● 新規購入図書紹介

図 書 名	著 者	出 版
<b>地 方 自 治</b>		
地域づくりのヒント 地域創生を進めるためのガイドブック	牧瀬稔	社会情報大学院大学 出版部
住民投票制度の手引 条例の制定から運用まで	選挙制度実務研究会(編)	国政情報センター
<b>社 会 ・ 経 済</b>		
環境経済学の第一歩	大沼あゆみ 柘植隆宏	有斐閣
貧困パンデミック 寝ている「公助」を叩き起こす	稲葉剛	明石書店
<b>教 育</b>		
教育論の新常識 格差・学力・政策・未来	松岡亮二(編著)	中央公論新社
<b>観 光</b>		
アフターコロナの観光学 COVID-19以後の「新しい観光様式」	遠藤英樹(編著)	新曜社
<b>そ の 他</b>		
図解でわかるカーボンニュートラル 脱炭素を実現するクリーンエネルギーシステム	エネルギー総合工学 研究所(編著)	技術評論社



むかし昔あるところに…



草木が芽吹きだし少しずつ春に近づいています。  
この時期になると毎年楽しみにしている地域の行事があります。決まったコースを子供たちは走り、大人は歩くという地域のマラソン大会です。コースは起伏が激しく大変ですが、走り終わった後に餅つき大会があり、つきたての餅と婦人部の方々が朝から仕込んでいた豚汁が振る舞われます。そんな楽しい行事がコロナ禍の影響で今年も中止となりました。地域の行事が一年、二年と中止になることで、住民同士の交流も減ってきたように思います。楽しかった行事が過去の思い出となり、昔話のようにならないか心配です。

さて、昔話といえば、空想的な話を独特な語り口や言い回しなどで語り伝えられているものです。一般的には子供に読み聞かせるようなものだと思いますが、その話から見えてくる教訓など、改めて考える機会を与えてくれます。

ここで、和歌山に伝わるキツネのお話を1つご紹介します。  
“明治の初め頃のお話です。寒い日の夜、夜なきうどん屋の勇さんが広瀬から雑賀道を通り、海草橋のたもとで常連の竹やんを待っていました。竹やんが来ると、うどんを作る方と食べる方のどちらが早い競争しようと言われ、勇さんが勝てばうどん代をいただき、竹やんが勝てばうどん代がただになるという勝負をしました。18杯食べたところで竹やんの勝ちとなり、竹やんは帰っていきました。勇さんがぼんやりしていると、また竹やんが来てうどんを注文したので、キツネにだまされていたことに気がきます。そして、竹やんがうどんを食べて帰った後、売り上げをみると、銀杏の葉が2枚入っていたという、一晩に二度もキツネにだまされたというお話です。”



このお話は踏んだり蹴つたりの日のことでしたが、悪い日ばかりではないと気持ちの切り替えが大切だと思わせてくれました。昔話はまだまだたくさんあります。ふるさと和歌山のお話となると何度読み返しても楽しいものですね。



【番外編】1月号でご紹介した、ミュージアム干支コレクションアワード2022「虎」の結果が発表され、和歌山城の「伏虎像」がグランプリに輝きました！